

温室の恋

国枝史郎

青空文庫

中央線木曾福島！

ただ斯う口の中で云っただけでも私の心は踊り立つ。それほど私は其町を——見捨てられたような其町を限り無く好いているのであった。人情、風俗、山川の姿……福島町の一切の物が私には愛らしく好ましい。

とは云え、私は、二度と再びその町を訪ねようとは思わない。何んと矛盾した考えでは無いか！ 併し私が其町で親しく経験した不思議な事件の恋物語を聴かれたなら恐らく誰でもが此矛盾を

認め頷かれるに違い無い。で私は是これから其不思議な恋愛悲劇の大あ略らましに就いて物語りの筆を進めようと思う。

×

木曾の盆踊を見ようと思つて、八月の終りに福島へ行つた。溪流すいらんと翠巒せまの相逼とつこつつた突忽とつこつとした風景がどんなに私を喜ばせたか。そして盆踊の雄大おおしさには私は肝さえ潰したのである。一千に近い大衆が狭い町筋に楕円を描いて夜の七八時から翌朝まで文字通り無むちゆう宙に踊り抜くのである。真率しんそつな文句、単調な身振り、節は誰も知っている「ナカノリさん」である。私は踊を見ている中うちに嬉しさに胸が躍つて来た。そうして全く可笑おかしな事には、踊子の中の女達が声を揃えて唄い出した時には、涙が眼から零れた

のであつた。「何んて幸福そうに唄っていることだろう」斯う思つた瞬間眼頭からヒヨイと涙が出たらしい。そうして涙がこぼれると一緒に何うやらこんなように呟いたらしい。

「俺は福島を祝福する！ どうしたって此町に住まないでは置かぬ！」

そうして實際、その時以来、私は福島に住むようになった。私は其時独身ではあつたし、夫れに私の商売なるものが——商売と云うのも烏漕がましいが、売文に依つて口過ぎを為し——それも通俗物の小説などで——生活を営んで居つたので、何処へ住もうと随意であつた。住めば住む程福島という町は私の趣味にピッタリと適つた何うにも離れ難無がたい町となつて来た。その中うちに誰か彼

か知己も出来て料理屋などとも懇意になった。

美満寿屋というのは表通の^{かみまち}上町に出来ている飲食店であつたが、主人というのが元を正せば洋服を着た方の種類の^{ひと}人物で、商人離れがしている上にお神さん^{かみ}というのが美濃産れの剛勢色つばい別嬪だったので、素敵も無い繁昌を見せていた。郡役所、税務署の若い役人や山林学校の先生や林野管理局の若手連が倶楽部のようにして集まるので常時^{いっ}も其家^{うち}は賑かであつた。

いつか私も其美満寿屋の常連の一人に成つていた所が、大きい声では云われぬが其処のお神さんのお寿賀さんに人知れず想いを焦^{こが}してさえた。

しかし私が語ろうとする不思議を極わめた恋愛というのは、決

して私とお寿賀さんとの二人の間に醸された所の其様そんな恋愛の事なので無いので、何う致しまして私などは、いつも気の利いた恋愛からは仲間外れにされる玉の方で、よくよく運の宜いい時でもワキ役にしか廻まわられないのである。

そして真実ほんとに其時の事件でも、私はワキ役に廻まわわされていた。

事件の始まりは、今も記した、飲食店の美満寿屋からで、或日は心易やすそうに其家の門口を潜かつたものである。秋の中央なかばではあつたけれど名に負う信州の高原地帯の木曾の福島であつたから、寒さは既に冬に近く炬燵こたつの欲しい陽気であつた。主人の仁太郎氏は丁度留守で大振りの櫂けやきの長火鉢の前にはお寿賀さんばかりが坐すわっていたが私を見ると頷うないて見せた。紫のてがらの大丸鬚すに黒

襟をかけた銘仙の袷あわせを丹前の下に着込んでいるのが商売柄途方も無く粋であつた。私はノソノソ上がり込んで長火鉢の向う側へ坐わろうとしたが見れば其席そこは塞がっている。

氣高いほど美貌の青年が悠然と坐わっているではないか。

私は其横へ坐わつたが言葉を出すことさえ出来なかつた。異常に勝れた人間の美は人の声をさえも封じるものと見える。私は曾かつて或新聞の劇評記者をしたこともあつて芝居の楽屋へも宜く這入はいり、扇雀だの福助だの千代之助だのの秀麗な俳優達の素顔なども珍らしからず見ているが、其時の青年に比べると姿なり容貌なり及びもつかぬ。無駄な形容は止めることにしよう。却かえつて其美を傷付けるようなものだ。其青年を眺めた時、卒然そつねんと私の思い出

したのはワイルドの描いたドリアングレーの事で、日本のワイルドたる魔派詩人の谷崎潤一郎氏にでも見せたなら何んなに随喜することだろう——そんな事をさえ思つたものである。

と、お寿賀さんが私に云つた。

「この方、貴郎あなたを待つていらつたのよ。ええもう今から二時間も前から……貴郎この方知つていらつしやるでしょう。往来でちよいちよいお逢いした筈ですよ」

二

そう云われて私は気が付いたのだが、成程その青年とは行き合

っている。しかも三回ほど行き逢っている。それも三回とも「謎の女」と連立っていたように思われる。

現実主義の私としては「謎の女」などというそういう言葉には、一向同情が無い筈であるのに其女だけには其言葉が莫迦ぼかにしつくり宛てはま箆はっているので、町の人達と同じようについ私も其言葉を使うのであった。それは何ういう女かというに、神戸の貿易商の令嬢とかいうことで、神経療養の目的を以て高原の空気を呼吸するため書生や女中を幾人か連れて夏頃から此町へ来ているのであったが、美貌うつくしさと贅沢ぜいたくさと交友の雑多な事とで、謎の女視べっしさされているのであった。彼女の屋敷はご料林の麓、酒井男爵の別墅よから半町距へだたった林の中にあつた、それは瀟しょう洒しゃたるバンガ

ロー式の小窓の多い建物で外見は寧ろ貧しかつたが内部の裝飾の
 燦然きらびやかさは眼を驚かすばかりであると町の人達は云つていた。

謎の女の姓名は園原雪枝と呼ばれていたが、雪枝は時々洋装姿を
 黒の逸物にゆらりと載せ拮据たる木曾の峠路を風のように駛はしらせ
 る事があつたが、大概は男の伴侶つれがあつた。一人は私の眼の前に
 いるドリアングレーのような美青年で最もう一人は酒井男爵家の放
 蕩息子の忠直であつた。

私が今しがた此美青年を三度見掛けたと云つたのも、詰つまり遠乗
 りに出て行く姿を往來みちを歩き乍ながら見掛けたのであつて、そう云え
 ば私も最もう一度だけ此青年を見掛けたことがある。それは今から
 半月程前に私が何気無く旅館はたごを出てご料林の方へ行つたことがあ

つたが其途みちすがら上のことである。バンガローの横手まで歩いて行くと広い後庭の中央に可成かなり大きな温室が夕陽に硝子屋根を反射させて秋霧の中に横倒わつていた。と、その温室の戸が開いて姿を現わした者がある。雪枝と而そして美青年である。珍らしい事には二人共支那服を纏っているではないか。私は思わず足を止めた。しかし二人はこの私には一向気付いていないらしい。

「水ヲ渡リ又水ヲ渡ル」と、雪枝が朗吟した。
すると青年が後を付けた。

「花ヲ看還マタ花ヲ看ル」

「春風江上ノ路」

「覚オボエズ君ガ家ニ到ル」

「でも今は春じゃありませんわね」雪枝は斯う云つて笑い出したが夫^それは男のような声であつた。

「春だつて直^じきに参りますよ」斯う答えたのは青年であるが、その声の中には云うに云われない悲哀の調子が籠もつていて酷く私の心を打つた。すると雪枝は復^{また}笑つて青年の方へ走り寄つたが両手を前へ差し出すと青年を軽々と抱き上げて温室の中へ這入つて行つた。つまり姿を隠したのであるが、それから二人は何うしたろう！ 何んで私が知るものか！

とは云え私は歩き出し乍ら斯う呟いたのは事実である。

「温室の恋よ。蒸されたる恋よ。……青年の方が受身らしい。女の方が年^と齡^しも上だ。さて、今のような甘つたるさでは接^{キッス}吻^スぐらい

では済まされそうも無いが……それにしても女のあの腕の力は何んと魂消たまげたものでは無いか！ あの力でグイと抱き締められたとしたら？ おお青年は壊れるかも知れない。何んの壊れたって宜いでは無いか！ 壊れ易やすそうな青年よ！ 玩具おもちゃのような青年よ！

ところが、壊れ易い玩具のような、その美しい青年が、長火鉢を前に私の横に端然と坐すわっているでは無いか。

「私を待たれたと有おっしや仰ると、何か御用でもあるのでしうか？」
お寿賀さんの言葉を怪しみながら私は青年へ斯う訊いた。

すると青年は慇懃に——しかし些少ちつともくどくは無く、私の方へ頭を下げたが、

「え」と如何にも初々しく小声で云つて口籠つた。どうやら頬をさえ染めている。

「先生は文士でいらつしやいましょう」急に元気を揮い起こしたと見えて青年は俄にわかに雄弁になつた、「それで是非ともお伺いして、お願いしたいことがございますのですけれど、一面識も無い私のことですから譬たとえお宿へお訪ねしましても、迎とてもお目には掛かれまいと存じまして……」

「そんな莫迦なことがあるものですか」私は途中で制したのであつた。「何時だつて構いませんから来いらつしやい。大体どんなお話でしようね？」

「それは……」と青年は吃驚びっくりするほど態度や声を狼狽うろたえさせた

が「どうも此処では申し上げられませんので……」

「ああそうですか、では何時でも、私の所へいらつして下さい——
—ところで貴郎のお名前は？」

「結城善也よしやと申します」

斯う云うと青年は、無意味ではあるが、凄い程美しく笑つたものである。

三

(以下結城善也の話)

……私の家柄から申しますと、大名華族なのでございます。少

將で予備になりましたが父は陸軍の軍人で而して子爵なのでございます。私は末児すえこでございましたから幼ちいさいとき時から可愛がられましたけれど、体が余り丈夫で無いのと性質が穏おとなし過ぎましたので軍人好みの父からは不甲斐無い者に思われていました。母は本当に心から私を愛してくれましたが私が十歳になった時逝去なくなつて了しまったのでございます。

私は天性絵が好きで才能も其方に有りましたので中学を卒業おえると学問を廃やめて専心其方へ進むことにして講習所通いを始めました。赤坂溜池の洋画研究会。あそこへ通ったのでございます。

そして此木曾の福島へ二月前に参りましたのも美しい風景を描く為で——写生旅行だったのでございます。来て見て私は木曾の

風景が日本画向きのものであつて洋画の写生の材料としては不向きだということを知りまして少し失望はしましたけれど、それでも私は毎日のようにカンヴァスを提げては出かけました。

みやのこし
宮越

へ向う峠の上からご料林を眺めた風景が鳥渡心ちよつとを引

きましたので或日私は三脚を据えて其写生に取りかかりました。

それから三日目のことでしたが最う九分通り出来上がつていたので、其日は何んと無く心嬉しく仕上げの筆を下していますと、宮越の方から蹄の音がさも軽快に聞えて来ましたが、私の恰度背ちようどう後しろまで来ると不図ふと止まったのでございます。そうして直ぐ女の声で斯う云っているのが聞えて来ました。

かんじ
「感かんじの宜い絵じゃありませんか。何んて深味のある緑色でしょう

ね……貴郎も矢^やつ張^ばりそう思われて？」

するとだらけ切った男の声が斯う答えるのが聞えて来ました。

「左様左様、よい絵ですなあ……もっと尤も私には絵の事なんか実は
んで解らないのですがね。貴女がよいと有仰るのですもの好い絵
で無くて何うしましょう」

「まあ何んて変な云い方でしょうね。酒井さんたら可笑しな方ね
……私この絵が気に入りました。初々しい所が素敵ですわ」

「全く、初々しい所が素敵ですなあ」

「黙っていらつしやいよ莫迦らしい……何んにも解かってもいな
い癖に」

「それでは沈黙しましょうかね。何も彼も貴女の御意のままです」

男の声は斯う云つてから如何にも人が好きそうに大きな笑いを破裂させました。私は五月蠅く思い乍らも何うすることも出来ませんので黙つて絵筆ばかりを動かしている中に、どうやら斯うやら其風景画は完全に出来上つて了いました。そうして其絵は掛値の無い所私の製作の其中では傑作の部に属す可き物で本当に感のよいスケッチでしたから嬉しく思わ無いこともありませんでした。で元気よく三脚を片付け旅宿へ帰えろうと為かけますと、其時まで観ていた男女の者から呼び止められたのでございます。

「あのウ大変失礼ですけれど……」

斯う云つたのは女の方で派手な乗馬服を着ていました。

「何かご用でございますか？」私は斯う云つて立ち止まりました。

「あのウ大變失礼ですけれど……お描きになつた其写スケッチ生シを譲つていただくことは出来ますまいか？」

私は意外に感じ乍らも多少得意でもありません。

「こんな拙まずい絵をでございませうか？」

「何を有仰います拙いなんて……立派な傑作ではございませうか」「しかし」と私は躊躇しながら「お譲りするということは何うも本意でございませぬので」

「おいおい、君々、どうしたものだ！ そんな事云わずに譲り給え。その方が君の為になるんだから」

不意に横から口を出したのは酒井というにやけた男でした。

「そうだ其方が君の為になる。金ならいくらでも出すんだからね

——君は此^{この}方^{かた}を知らないね。有名な園原雪枝さんだよ……：：～
して僕は酒井という者だ。酒井男爵の次男のね……：：：：～

「へ」と私は夫れを聞くと思わず口の中で云いました「何んて下らない奴だろう！ 男爵の次男がどうしたんだ！」——そこで私は苦笑を浮かべ斯う冷淡に云つてやりました。

「私はまだまだ素^{アマチュア}人^アですから、絵を売つてお金を儲けるとい

うことは心宜しとしていないのですから……：：：：：：：：：：：：：：～酒井男爵の御次男だ
そうで、そうすると華族の若様ですね……：：：：～ところが私もそのような
ですよ。結城子爵の三男の善也というのが私の名です——この絵
は売品ではございませんからお売りすることは出来ませんけれど
折角^ご懇望^のの様子ですから進^{さし}呈^{あげ}することに致しましょう」

斯う云うと私は其写生を雪枝という人の手に渡して、どんどん峠を下りて来ました。

四

そうして旅宿^{やど}へ帰った頃には其絵のことも彼女のこと増して酒井のことなどは思い浮かべようとさえ為ませんでした。次に描く^{つも}意りの画稿のことを私は思い詰めていたのです。ところが翌日の朝早く、彼女の所から使いの女が私を招^よびに参りました。「昨日の絵のお礼も申し度^たし、それに仏蘭西^{フランス}から最近届いた名画の翻刻が沢山に有るからお目にかけて度い」というのです。「名画の

翻刻なら見度いものだ」斯う思つて私は使女に従いて彼女の家へ
行つて見ました。さすがに自慢で招んだだけあつて彼女の持つて
いる名画の翻刻はいずれも立派な物ばかりでお陰で私は其日一日
眼の正月を致しました。

やがて私は案内されて温室へ這入つて見ましたが、よくも是程
蒐めたものと心から感心されるほど支那の花が蒐められてありま
した。そうして温室の飾方も支那風なのでございます。と、不思
議にも彼女迄が支那風のことを云つたものです。

「私と支那とは昔から離れられない仲なのですよ……。貴郎お嫌
い、支那の風は？ 似合うちに相違ありませんわ、貴郎が支那服を
召されたらね」——こんな事を云うではありませんか。

その中うち酒井も姿を見せ三人で愉快に話し合いましたが、最初に想像したよりも、酒井という男は好人物で、それに大変なひょうき 剽ひょうき 軽けん者で、軽口ばかりを利くのでした。その癖本心は熱情家で確に彼女を愛しているのに習性の剽軽が災して云い出すことが出来ないという、一面から云うと気の毒な近代人らしい男なのでそれが私の氣に入つて直ぐに親しくなりました。

その日を最初に夫れからというものは、毎日毎日彼女の家で日を送くるようになりました。漸だんだん時親だんだんしくなるに連れて、彼女の家の内幕が次第に解かつて参りました。その中分けても私の眼に怪しく映つてならなかつたのは料理人の季参きさんでございます。彼は純粹の広東人かんとうじんで、常時いつきたな穢まじい支那服を纏まとい弁髪をさえ貯えていま

したが、何ういう訳か彼女の家庭では一番勢力を持っていました。主人の彼女さえ季参の為には時々叱られる程でした。

それに最う一つ、私に執とつて、何うにも不思議でならないのは、温室に這入っている間中、何処か手近の地の底を誰か掘ってでもいるような音が、聞えて来ることでございます。

「どこから聞えて来るのでしょうね、地を掘るようなあの音は？」
何気無く或日斯う云って彼女に私は訊いたものです。

「え？　音ですって？　どんな音？……何んにも聞えないじゃありませんか！」

「いいえ、聞えて来ますとも、地の底を掘るような物音が」

「叱しッ！」と突然鋭い声で彼女は私に注意しました。驚いて彼女の

顔を見ると、恐怖に充ちた燃ゆるような眼が、硝子壁を透して庭の隅へ注がれているではありませんか。そして其視線の落ちた所には、料理人の季参が腕を組んで歩き廻わっているのです。

或日彼女は私を捉らえて無理に支那服を着せました。

「ね、いい子だからお着けなさいよ。料理人の季参が喜びますからね」

で私は着ることは着たものの決して愉快ではありませんでした。 「どうして料理人コックなんかのご機嫌をああして執らなければならないのであろう？」これが私には不思議でした。不思議といえば例の酒井が最近めつきり剽軽が止んで気むずかしく憂鬱になったことも不思議と云えば不思議でした。

ところが或日その酒井がむつつりとした表情を浮かべたまま一通の手紙を私の手へ黙って渡してよこしました。

手紙の文句は斯うなのです。

「呪われたる接吻に気を付けよ——君は今日それを得るであろう？ 曾ては——そうだ過去に於ては、僕のものであつた其接吻を！」

無論、最初は何んのことだか、私には明瞭はつきり解かりませんでしたけれど、其日の午後になつた時、その意味が解かつたのでございます。私は彼女から温室の中で接吻されたのでございます。しかも熱烈な接吻を。

その日以来、支那式の温室は、私達に執つては何より楽しい隠か

くれが
家となつたのでございます。恋の隠家、接吻の場所——媾^{あい}曳^{びき}
の場^{にわ}となつたのでした。

そして彼女は料理人の季参に見られるのを恐れながら際どい隙
をうかがつては私を温室へ連れ込むのでした。恰^{あた}も季参が彼女の
良人^{おっと}で、その良人の眼を盗みながら、不義の快樂にでも更^ふけつて
いるように、私達は快樂に更けるのでした。

五

私は大変幸福でした。美しい婦人に愛される！ これ以上の幸
福はありますまい。ほんとに彼女は衷心から私を愛してくれまし

た。私の方でも狂^{きちがい}人のように彼女を愛しているのです。この上の欲には例の季参が不気味の眼をして監視しないように、そして酒井が悲しそうな、失恋の傷手に堪えないような、憐れな様子を^し為てくれないようにと、願うばかりでございました。

けれど虫のよい此願だけは二つとも失敗でございました。季参は益々私達の様子を憎悪に充ちた眼付をして鳥渡の油断も無く見張るのでした。酒井は酒井で^{しやうすい}憔悴した元気の無い顔を曇らせては矢張り遠くから私達の様子をじっと眺めて居るのでした。

「ほんとに気の毒な酒井さん」彼女は或時斯う云って気が無さそうに笑いました「あの人は今に今よりももつと気の毒な身分になりましょうよ」

「それでも貴女は私の以前まえにはあの人を愛していらつしたの
しょう?」

私は若干いくらかかの嫉妬を以て斯う突つ込んでやりました。

「いいえ、愛してはいませんでした。如何にも愛しているかのよ
うな左様そういう素振りをしましたけれど……それが私の役目でした
ものね。そうよ、私は、そう為するように命い令つけられていたのです
もの」

「誰がそんな事を命令けたのです?」私は驚いて尋ねました。

「あのね、それは……」と云いかけて俄に彼女は云い淀みました。
ふと見ると温室の戸口の横の植込の陰に人影が——季参の影がチ
ラリと射して、すぐ消え去つて了いましたが、確に私達の話し声

を立ち聞きしたのに相違ありません。

その翌日のことでしたが、彼女の家うちへ行つて見ると、彼女は顔の半面を繻ほうたい帯たいしているではありませんか。

「どうしたのです、その繻帯は」

私の驚くのを手を振つて制し彼女は寂しく笑いました。

「私ぶ打たれたのよあの男に……でもね、いいのよ、そんな事は……さあ温室へ行きましょう。綺麗な花に取り囲まれて綺麗な貴郎と話してさえいれば、私それだけで満足ですよ」

そこで二人は裏庭の温室へ這入つて行きました。私達は直ぐに抱き合つて心行くまで接吻をして並んで椅子へ腰掛けました。咽せ返えるような花の匂！ キラキラ射し込む陽の光！ そして、

不思議な、地を掘るような、例の物音が手近の辺あたりからひっきり無しに聞えて来る。何んだか私は恍惚うっとりとして、彼女の胸の上へ後脳なじを当て何時迄も黙って居りました。

すると、優しいすすりなき歎なげの聲が、聞えて来たではありませんか。そうして私の額の上へ熱い滴が落ちて来ました。彼女が泣いているのでした。

不意の発作とでも云うのでしよう。彼女は私を砕ける程固く劇しく抱き締めましたが、謔言のような取り止めの無い声で斯う云いつづけるではありませんか。

「死にましよう死にましよう死にましようよ……私殺されるかも知れないのよ！ 殺したければ殺すがいいわ！ 殺されたって別

れはしない！ 殺される事が恐ろしくて何うして此こんな様恋が出来るものか！ …… 貴郎、貴郎、ねえ善也さん！ 私どうしたって別れなくってよ！ 何んて貴郎は美しいんでしょう！ そうして貴郎の美しさは厭いやらしい美しさではありませんわ！ 天使のような美しさよ！ 私は貴郎と逢つてから、貴郎の美しさを知つてから、心がまるつきり変わりましたのよ。そうして私の此心変りがあの男には恐ろしいのです。それで、私を、嚇かくはく迫して貴郎から遠避とおざけようとするのです！ けれど私は何んな事があつても決して貴郎とは別れやしません！ 貴郎と別れるくらいなら私は彼奴等あいつと縁を切つて、貴郎を連れて何処へでも行つて、それこそ世界の涯へでも行つて、二人つきりで暮らしますわ！ 私は貴郎の美しさ

に依よつて穢けがれている過去の私の心を浄めようと為なしているんじゃないや
りませんか！ でも左様したら彼奴等きやつは私を生かしては置きます
まい。私ばかりか貴郎をさえ殺すに違いありませんわ。それでは
貴郎がお気の毒ね。気の毒と云えば酒井さんも本当にお気の毒で
ございますわ。あの方はお金があるために悪者達に狙ねらわれている
し、貴郎はあんまり美しい為ために私のような悪い女に魅み込まれたで
はありませんか——おや、畜生！ また彼奴が、彼方あそこから私達を
見張まっている！」

本当に、温室の戸口の陰に、季参が佇たたんで居ゐりました。

何んという凶悪の顔だったでしょう！

彼女は復も私を抱き締めヒステリカルな声を上げて、のべつに

此様事を喋舌りながら、額と云わず頸と云わず接吻の雨を降らすのでした。

「見せ付けてやりましょう、構う事は無い！　そうして本当に私達も行く所まで行きましょう！　歓楽の澱まで飲み干しましょう！　私達の生命は短いものですものね！」

そうして、真実、私と彼女は、其日初めて温室の中で諸々の花に圍繞されながら恋の甘酒の最後の澱まで飲み干して了ったのでございます……。

六

結城善也の物語は尚なほ長く続いたのではあつたけれど、要するに夫れは料理人の季参に対する反感と取越し苦勞とに過ぎなかつた。季参の持つて来た紅茶の中に毒でも這入つていたと見えてそれを飲んだ晩に吐瀉したなどと左様そう云つたような話であつた。

「私と雪枝とはあの男のために遠からず殺せつがい害がいされましよう。私にはそんなように思われます。ご迷惑のお願いかも知れませんが、私が殺されたとお聞きになりましたら、今日の話をお父の許までお知らせ下さることは出来すまいか。これをお頼みしたい為にお伺いしたのでございますが」

最後に彼は斯う云つたので、私は笑い乍ら諾うべなつた。

喜んで歸つて行く彼の姿を私は門口で見送つていたが、確かこ

んなように呟いた筈だ。

「あまりに恋愛が幸福過ぎるとつい不安心にも思われるものさ。あの美しい青年は自分で自分の恋愛に不安の陰影を投じている迄のものさ」

私の考えは正しかったと見えて、平和な木曾の福島町まちには、秋が行つて冬が来て、その冬が終えて春になつても是という事件も起こらなかつた。

福島ふくしまの春の美しさ！ 桜咲き鳥啼き水流れ、夢のようだと云いたい。其夢よりも美しい。町の人達は芸者を連れて妙見山へ出かけて行き山々谷々に咲き乱れている薄紅の桜の花を酒の肴とにして宴を開き、夜になるのを待ち兼ねて提灯を点もして山を下り町筋

を陽気に練りながら料理屋さして練り込むのであった。お陰で美満寿屋も繁昌しお寿賀さんの女将振ぶりが自然に精彩を加えるようになつた。

一人寂しいのは私であつた。いつか私の恋心がお寿賀さんの胸にも通じたと見えて力の籠もつた握手の一つや可愛い色眼の二つや三つは、冬の頃から頂戴いただいていたものを、花見の客が無闇くに立て込む今日此頃では忘れたかのようにお寿賀さんは夫れを呉くれようともしない。一人寂しい筈では無いか、で私は心で呟いた。

「私は福島を祝福しまい。私は福島から去ろうと思う。左様なら、左様なら、左様ならと云つて！」

しかし矢つ張り呟くばかりで断行することは出来なかつた。未

練が残っているからでもあろう。

斯うして幾日か日が経った。桜の花も何時か散って野山に緑色が萌えるようになった。

私は無闇に詠嘆した。

おぎそじ
小木曾路を今日もさまよう空ろ心うつつ

あけび
通草の花は藪陰に見し、

ひとり来てまた一人かえる昼の山

声に出でつつ ひとりごと 独言 いう

などと旨くも無い歌などを、作ったというのも寂しいからである。

此時、平和な福島、町の人達を驚かせて不思議な窃盗が行わ

れた。ご料林の麓に聳えている酒井男爵の別墅が其唯一の被害者で、数十万円と値踏みされていた沢山な骨董や貴金属や現金や衣類が殆ど全部、地の底へでも沈んだかのように、悉く消えて無くなっていた。

調査の結果、床下の土地に、一筋の坑道が掘られてあつて、それが意外にも園原家の温室へ通じているということが世間へ発表された時、人達はあつと云つて驚いたが、その園原家の温室の中、虹のように美しい無数の花に、すっかり周囲を取り巻かれ二人の美しい若い男女が縋り合つたまま死んでいるという、そういう事実を聞かされた時には、町の人達より此私が何んなに肝を潰したか！

「それではあの時のあの話は、みんな本当であつたのか」

思わずこんなように呟いたが、後の祭で何んの役にも立たない。私は無限の感慨に打たれ、良心をさえ苦しめたが、せめて約束でも果そうと、結城善也氏の嚴父に宛てて長い手紙を書き出した。その手紙の中へこんな意味のことを、私は記したように記憶おぼえている。

「……（前略）……あなたのご子息善也様は立派なお方でございます。……その立派さが不逞の女——園原雪枝と申す女は、支那人季参めかけの妾めかけでもあり悪事の相棒でもあつたそうですが——その悪わるも漢まの女の心をさえ感化させたほどでございます。そして女のその変心は真の悪漢季参に取つては大きな傷手だったのでございま

す。それで季参は二人の者を無きものにしようとし、決心し温室の中の幾個いくつかの花へ強い毒薬を塗つたのだそうです……酒井家を襲つた盗賊も勿論季参でございました。酒井家の巨財を奪おうために、季参一味の盗賊共はわざわざ此土地へ移転して参り、雪枝の美貌を囿こにして酒井家の子息をおびき寄せようと目算めくろんでいたのだそうです。酒井家の財産と季参とはいまだに行衛は知られませぬが逃げ遅れて捕らえられた賊の口から、やっと是だけの事だけを訊き取ることが出来たのだと土地の警官は申されました：

…（下略）

私が福島を去つたのはそれから間も無くのことであつた。

くるま

俣の上一眼は見んと眼を返えす

そこには姿あらざりにけり

これが別離の歌なのであるが、つまり愈々いよいよ俵に乗って福島町を去ろうとした時にもお寿賀さんは送つてもくれなかつたのである。

青空文庫情報

底本：「国枝史郎探偵小説全集 全一卷」作品社

2005（平成17）年9月15日第1刷発行

底本の親本：「ポケット」

1924（大正13）年3月

初出：「ポケット」

1924（大正13）年3月

入力：門田裕志

校正：湖山ルル

2014年6月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

温室の恋

国枝史郎

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>